



と www.tenpla.net

プラネタリウム

vol.
205

☆ 高梨直紘 (東京大学) / 平松正顕 (国立天文台)

今年初めからしばらくの間、施設の改修工事でお休みしていた六本木天文クラブの活動がいよいよ再開します。この間、オンラインで実施している毎月の星空解説セミナーはお休みすることなく続けていたのですが、天体観望会は完全にオフ。出張六本木天文クラブと銘打って六本木ヒルズのある港区内のさまざまな場所で観望会でもしようかとも考えていたのですが、こちらは新型コロナウイルスの影響で中止に。まあ、致し方ないですね。

2021年度の活動は、全部で30回ほどを予定しています。毎月の星空解説セミナーと定例観望会を軸に、皆既月食や流星群などの天文現象や、新旧の七夕や中秋の名月など文化的な意味のあるタイミングに合わせて、観望会などを企画しています。詳しいスケジュールは六本木天文クラブのウェブサイトをご覧くださいなのですが、お勧めしたいのは季節を変えて4回も組まれている「月の出を見る会」。読んで字の如く、月の出を楽しむ会です。それ以上でも、それ以下でもありません。ただ月の出を見るだけのイベント。でも、これがシンプルながらとってもいいんです。

ビルが立ち並ぶ東京は、地平線を望むのが難しい街。どこに行っても高い建物に囲まれていて、地上にいる限り遠くの地平まで見通すことはできません。しかし、六本木天文クラブが観望会を行っている六本木ヒルズ森タワー屋上は違います。270メートルの高さから眺めれば、はるか遠くまで続く東京の街並みを一望することができるのです。明るくきらめく東京の夜景の向こうに、ぼうっと顔を出す赤い月を見つけた時の感動は想像以上。東京都心にあり、かつ、オープンエアな屋上施設を会場に使っている六本木天文クラブならではの、現代的な月の味わい方の提案だと思っています。

実はこのイベント、ちゃんと歴史的背景があります。皆さんは東京の高輪のあたりが、月見の名所だったことをご存じですか？山手線に新設された「高輪ゲートウェイ駅」として、その地名を聞いたことがあるという方もいらっしゃるでしょう。新幹線も停まる品川駅にもほど近い高輪の地は、今でこそすっかり埋め立てられてしまいましたが、江戸の昔には目の前に海が広がる場所でした。東海道沿いの大木戸(関所)が設けられた土地でもあり、旅立つ人々を見送る場所としても賑わいを見せていた高輪の地。少し高台に登れば、房総の山々も遠くに望め、風光明媚な場所として江戸の人々に愛されていたそうです。

この高輪の地が特に賑わいを見せたのが、旧暦の7月26日の夜でした。江戸の年中行事について綴られた「東都歳事記」には、“この月二十六日の夜を二十六夜といいて、今夜の月の出は三尊の姿に上天すとかいいて、この三光を拝さばやと人々高台の地に、海の眺

新型コロナウイルスと上手に付き合いながら、今年度も六本木天文クラブではさまざまなイベントを実施していきます。その中でも一押しは、「月の出を見る会」!



東京の夜景を眼下に、月が浮かび上がる様子を楽しみます。



初代歌川広重による「東都名所高輪廿六夜待遊興之図」。みんな楽しそう。

望をえらみて相集まり、時刻を待つ」とあるように、人々が集まって月の出を待つ行事について書かれています。この行事は「二十六夜待」と呼ばれ、高輪あたりの海辺はたいへんな賑わったことが伝わっています。26日の月といえば、三日月の逆バージョン。月の出の時刻は午前3時頃と、とっても夜更かしをしないといけません、だからこそ楽しい行事だったのでしょう。

さて、この行事は今ではすっかり影も形もありません。しかし、なかなか素敵なイベントじゃありませんか？元々は信仰から始まった行事ですが、浮世絵に伝わる当時の様子を見る限り、とても信仰のために集まっているとは思えません。単純に楽しかったんでしょうね。でも、二十六夜を口実に夜に街に繰り出す非日常感、今も昔も変わらないはず。なら、復活させちゃおう。そう考えたのが、この「月の出を見る会」を企画したきっかけでした。ラッキーなことに、六本木ヒルズも高輪も同じ港区の中。残念ながらいまは高輪からはなかなか東京湾を眺めることはできませんが、六本木ヒルズ森タワーの屋上からなら大丈夫。午前三時まで待つのはちょっときついで十八夜くらいの設定に変えましたが、そこはご愛敬。ぜひみなさんも、江戸の昔を想像しながら、一緒に月を眺めてみませんか？